

渋沢敬三と植民地・台湾

——『台湾高雄州潮州郡下 パイワン族の採訪記録』と“*The Illustrated Ethnography of Formosan Aborigines : the Yami Tribe*”をめぐる——

Shibusawa Keizo and Colonial Formosa

About “PAIWAN” and “*The Illustrated Ethnography of Formosan Aborigines*”

原田 健一

HARADA Kenichi

要 旨

渋沢敬三はロンドンより帰国した後、石黒忠篤と共に台湾米穀大会に出席するために1926年4月18日から5月2日まで台湾を訪れ、5月2日から12日まで沖縄に滞在した。

既に、この時の沖縄の旅の重要性を指摘する論者は多い。しかしながら、ここでは、渋沢のこの旅の動機のもう一つの中心であった植民地・台湾について考察し、さらには台湾原住民に会ったことが渋沢にとって大きな意味をもったことを指摘する。そこには、台湾から沖縄、薩南十島、日本を鳥瞰的に捉え、その全てを海島としてフィールド化しようとする、更には「悠久の民族史」をみようとする渋沢の構想力があつた。渋沢は「日本島帝国」の現実を顕在化させるために、映画と写真集によるモノグラフ、民族誌をつくれないうだろうかを創案する。

ところで、その構想は、実際はどんな成果、実りをもたらしたのだろうか。宮本馨太郎による映画『台湾高雄州潮州郡下 パイワン族の採訪記録』（以下、『パイワン族の採訪記録』）と、鹿野忠雄の“*The illustrated ethnography of Formosan aborigines : the Yami tribe*”（以下、“*The illustrated ethnography of Formosan aborigines*”）は、本来は相補い合う一つのモノグラフとして構想されたが、結局、別々の形になる。しかし、時間と場所が異なることで、民族学と映像という異なった領域が越境しあい重なり交錯する、飛躍が生み出され、新しい研究のスタイル、映像表現が創発されることになる。

【キーワード】 治者、台湾原住民、旧慣調査、薩南十島、柳田国男、漁業制度改革

1. 宮本馨太郎『パイワン族の採訪記録』と鹿野忠雄“*The illustrated ethnography of Formosan aborigines*”、その二つの関係

映画『パイワン族の採訪記録』冒頭には、タイトルとして「アチックミュージアム」の英語のロゴタイトル「am」が入っている（図1）。現在確認されているところでは、このロゴタイトルが入っているアチックミュージアムの映画は、これのみである。あるいは、フィルム缶の記載は「PAIWAN」とあり（加藤、2002）、高木一夫が作成したフィルムリストにも「PAIWAN」という

題が記載されている（高木、1972）。

鹿野忠雄の紅頭嶼の本は当初、アチックミュージアム彙報 30『台湾原住民図誌』とされていたが、後に瀬川孝吉との共著として敗戦間近の1945（昭和20）年4月20日に“*The illustrated ethnography of Formosan aborigines*”として、英文で刊行されている（図2）。

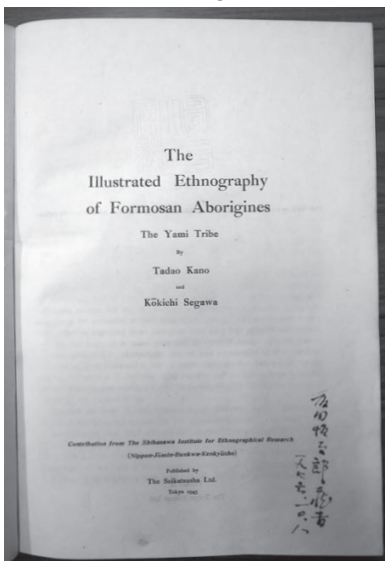
素朴な疑問から始める必要があるかもしれない。なぜこの台湾調査の映画、写真集は、英語表記なのか？ それを考えるには、やはり、この二つの調査のきっかけとなった鹿野忠雄とアチックミュージアムとの関係のみておく必要がある。鹿野忠雄は1933（昭和8）年に社会地理学の飯塚浩二の紹介で、渋沢敬三と初めて会っている。その後、1936（昭和12）年12月2日のアチックミュージアムの例会に鹿野が出席する。その時の出席者は、渋沢敬三、古野清人、村上清文、木川半之丞、小川徹、宮本馨太郎、知里真志保、磯貝勇、内□昇三であったが（伊藤、1987、28※編注：□は不明字）、話が台湾原住民の民具のことになり、鹿野が特に紅頭嶼ヤミ族の生活具を蒐集する必要を説いた。渋沢はそれに同意をすると、さっそく鹿野の指導のもとアチックミュージアムとして調査と民具の蒐集をすることが決まった（山崎、1992、177）。『アチックマンスリー』には「同人小川・宮本両氏 紅頭嶼採訪の途に上らる 一期待さるゝそのレポート」（アチック、1937a、89）とあり、調査が紅頭嶼に行くものであったことは間違いない。しかし結局、宮本の個人的都合で急遽旅程を変更し、パイワン族の採訪調査となる。

この調査は変更後の計画を含めて、鹿野が段取りをし、一緒に帯同し、同人である宮本、小川が行った。旅程を簡単に記すと、1937年3月20日東京を發ち、3月23日基隆に着。3月26日に屏東に入り、パイワン族の村々に入り約12日間の調査を行い、4月6日にライを出立し15日に帰京した（宮本・小川、1937、1~3）。ちなみに、4月20日に宮本馨太郎の結婚式が行われている。

図1 『パイワン族の採訪記録』冒頭の英文ロゴタイトル



図2 “*The illustrated ethnography of Formosan aborigines*” 1頁



なお、アチックミュージアムでは1937年初頭に新しく16ミリカメラを購入し（アチック、1937b、90）、この調査のために、映画フィルム約1,000呎を用意している（宮本、1937、94）。また、写真フィルムも用意されており、鹿野の1937年6月6日付渋沢敬三宛封書（渋沢史料館蔵）ではパイワン族の写真を2,000枚以上撮影し、民具を500点以上蒐集したと記している。その後、6月から長期にわたって紅頭嶼に滞在し民具を網羅したいと記している（山崎、1992、180~181）。これらの準備からは、渋沢敬三がこの紅頭嶼調査を、網羅的な民具の蒐集と、映画と写真を組み合わせた記録によるモノグラフ的な調査記録を作成しようという構想があったことがうかがえる。

つまり、宮本馨太郎による映画『パイワン族の採訪記録』と、鹿野忠雄の写真集“*The illustrated ethnography of Formosan aborigines*”は、本来は相補い合う一つのモノグラフとして構想されたが、さまざまな理由で別々の形になってしまった。

2. アチックミュージアムの時期区分と問題の所在

1) 時期区分

渋沢敬三のこの映画と写真集によるモノグラフの構想は、アチックミュージアムの調査研究のどういった文脈のなかで派生したものなのか。まずは、それを解きほぐくために、アチックミュージアムの活動期間、全体を大きく捉えておく必要がある。

ここでは、中村俊亀智が『民具標本収蔵原簿』（神奈川大学日本常民文化研究所蔵）を分析し（中村、1983）、アチックミュージアムの時期区分を3つの時期に分けているものを元にし、若干の修正をし、提示する。

アチックミュージアムの活動期の1921年から1942年の22年間の時期を、前期（1921年～1926年）、中期（1927年～1933年）、後期（1934年～1942年）と区分しておく。

前期は、渋沢敬三がアチックミュージアムソサエティを始めた年から、1926年までである。ここでの蒐集の中心は、郷土玩具などである。渋沢敬三が1922年9月から1925年8月にかけて、ロンドンに滞在し中断した期間をはさんでいる。

中期は、1927年よりアチックミュージアムに早川孝太郎が参加するようになり、花祭の調査研究がアチックミュージアムの中心となると同時に、郷土玩具から民俗具へと蒐集品が大きく転換する。

また、この時期、渋沢敬三は、渋沢栄一と渋沢篤二の死という個人としても渋沢家としても大きな事態に遇う。そして、1932年1月から5月まで渋沢敬三は伊豆の三津で病氣療養をするが、そこで、内浦古文書を発見することになる。そして、1933年11月に早川が九州帝国大学農学部・農業経済研究室助手に赴くことになり、アチックミュージアムから離れる。

後期（1934年～1942年）は、早川という蒐集を担った中心人物がいなくなり、同人による集団的な体制が整えられ、総合的な調査が試みられる。地域も三河・花祭という中心的な調査対象だけでなく、内浦古文書の発見を機に漁業をめぐる領域が開拓され、湖川、半島や島などが着目される。さらに地域も、朝鮮、台湾など植民地へと拡大することになる。こうした活動の活発化とともに、1935年7月30日から『アチックマンズリー』が刊行され、同年9月より『アチックミュージアム日誌』がつけられるようになる。また、これらの調査や研究は、1934年からアチックミュージアム彙報52冊、アチックミュージアムノート22冊、文献索引など7冊という形で続々と刊行されることになる。

なお、補足として、日本常民文化研究所に改称後の1943年から研究所が財団法人となった1950年までの、戦時から占領期にかけての時期をあげておく。

2) アチックミュージアム中期における「社会経済史的」問題

この時期区分でいうと、アチックミュージアムの本格的な調査研究が始まったのは中期からということになる。中期の調査の中心が早川であったことは間違いないが、渋沢は早川のモノグラフ『花祭』について、「百頁くらいのつもりを千七百頁の書物に太らした早川君の労力は並大抵ではなかった。（略）一つの行事であれだけまとめたものは世界にだって類例は少ないと思う。もうこれで解ったと云わないで、一つことをどこまでも掘り返せば、いくらでも掘り下げ得るものだということ悟った」と大きな達成感を感じると同時に、不足するもの、自分との違いを感じたとし、「早川君の花祭の力作はどこまでも感心するが、自分に物足らぬ感じが今なおしているのは、この行事

に対する社会経済史的な裏付のなかったことである」(渋沢、[1933] 1992、13~14)としている。

また、その24年後、早川の著書『花祭』が再刊されるにあたって渋沢は序を寄せ、「本著の出現で早川さんの民俗学における能力は高く評価されたが、いろいろ話し合っているうちに、花祭の奥に、また基底にある宗教学的または社会経済史的、更には農村地理学的面についての解明に不十分な点も感じられた」(渋沢、[1957] 1992、395)と、再び、「社会経済史(学)的」な面に不足があったことを繰り返し指摘している。

ところで、この「社会経済史的」とは何を意味しているのか、渋沢は特に説明をしていない。渋沢はこの序で、「中学時代からひそかに生物学に心をよせていたものの、ついにその道へは行かなかった私は、大正の初期から経済史や民族学に興味を持った」(渋沢、[1957] 1992、394)としている。生物学を志す一研究者から渋沢家の家督を継ぐ者へと変わったことを契機に、興味の志向も変え「経済史や民族学」へと転換したというのだ。渋沢の「社会経済史的」の意味するものとは、こうした立場と研究領域の転換とが折り重なったところから出てくるモチーフである。この渋沢の「社会経済史的」なものは、アチックミュージアムという私設の研究所の方向性と、どう関わるのだろうか。

中期に早川と同じように深く関わった村上清文は、当時のことを回想して「ほくは柳田先生の考え方に一つの疑問を持っていただけです」とし、この時期のアチックミュージアムの方向性を計る鏡として柳田国男の仕事があったことを示している。村上は、社会のなかに確かにある「残存物というものが」、「生活の中に生きていて何らかの働きを持っている。要するにその面からとらえて行きたいという考え方があったわけです」とし、だから、柳田のように、「単なる歴史の遺物として古い時代のものを結びつけてやるという歴史的方法じゃなくして、実際その村にある機構、社会構造の中においてどういうふうに生きているかという面から見たいという気持ちがあった」という。渋沢は初めこの村上の考え方を「君は社会学だと言って」(村上、1979、521)だいぶおこったとする。当時、同じように柳田を鏡とし社会学へと傾注していった、渋沢の盟友である有賀喜左衛門のことを考えると興味深い意見である。

村上の回想から、この時期、一つの村に長期滞在するフィールドワーク、調査方法がアチックミュージアムのなかで検討されていたことが分かるのだが、実際に、1934年11月から1935年9月にかけて村上は約1年近く新潟県の三面で調査をすることになる。渋沢は最終的には、村上の社会学的な考え方を認めたことになる。

ところで、渋沢家の後継者である渋沢敬三個人にとって、こうした長期のフィールドワークは現実的ではない。考慮されなければならないのは、渋沢敬三が夜は研究者としての立場をとりつつも、昼間は実際の実業社会のなかで第一銀行の重役として、日本の経済機構のなかで重要な役割の一端をにない、さまざまな決断をし、その決断の結果を通して、社会のあり方、構造を知ることができる立場にいたことである。渋沢が銀行員と研究者の二足のわらじを履いていたことは重要である。

ここで、その日々の銀行業務をみておこう。中期の時、渋沢は第一銀行の重役として融資の最終判断を行っていたが、酒井杏之助によれば渋沢の仕事のしかたは「いかもの食い」のところがあったという。「今まであまり縁のなかった人でも、渋沢さんが、この人なら思い切って金を貸しても大丈夫だということで貸して、当たった」例もあったが、「中には、小さなもので、これは非常にいいものなんだ、国家的にも成功すれば非常にいいものなんだと言ってやったけれども、根っからあまりよくならなかった」ものもあったという。そういう時、渋沢は「どうも自分の考えたようになかなかいかなかった。やはり物は盲点というものがあるね、初めいいつもりであったが、考えられないファクターがやはりあるので、どうもあれはほんとうに初めのようなふうに行けば、これはそ

の事業もいいのだし、国のためにもなると思ったけれども、やはりあれはだめだね」(酒井、1979、532～533)ともらしていたという。

渋沢の融資の判断基準に日本国家、社会のためになるものという考えがあったことは間違いない。しかし、どんなに社会のためになる企画、事業でも産業化しやすいものと産業化しにくいものがある。融資する銀行家としていえば、産業化し、利潤を生むことを通して一般化していく社会的過程が重要となる。しかし、利潤を生まず産業化もせず一般化しにくいものが、社会全体で見れば必要なものがある。重要なのは、産業化しやすいものと産業化しにくいものの内実であり、その二つの関係である。日々、経済界で活動をするものにとって、社会経済史的な観点とは、こういった問題を同時に考えようとするものといってよい。

3. 渋沢敬三における最初の探訪の旅

1) アチックミュージアム前期における「博物館」という問題

ここで、アチックミュージアム前期にまだ学生だった渋沢敬三がどういった問題を考え、関心を寄せていたかもみてみよう。

宮本馨太郎はアチックミュージアムの誕生の背景に、渋沢敬三が棚橋源太郎の教え子であった(徳川、1963、18)ことを指摘し、「明治三十六年、渋沢先生が東京高等師範学校附属小学校に入学された時、棚橋先生は同校訓導であり、ついで東京高等師範学校教授となり、三十九年、同校附属教育博物館主事をおこなわれていたから、幼い渋沢先生に棚橋先生の博物館教育が影響する」(宮本、1865、255)とあるところがあったとする。確かに、1918(大正7)年、大学1年の時、一緒にアチック「ミュージアム」ソサエティを立ち上げた鈴木醇、宮本璋は小学校以来の同窓であり、博物館が持つ実物教育のあり方だけでなく、物に対してどう想像力を働かせるかといったことに対する認識を共有していた仲間であった。

ところで、中学時代に心をよせていた生物学から経済史や民族学へと興味のある方を変えていった理由の一つとして、「穂積陳重・石黒忠篤・柳田国男等の諸先生の影響が大きかった」とする。大学卒業後、横浜正金銀行に入社し、ロンドン支店にいるときも「柳田先生にはロンドンでもいろいろ教を受けた」(渋沢、[1957]1992、394)としている。どういった教を受けたかは分からないが、旅譜やロンドン滞在時の文章(「伊太利旅行記」など)をみると博物館や美術館などに足繁く通っている。博物館は自然科学系だけでなく人文科学系の博物館にも行っており、後に民族学博物館を作るときに参照したと考えられるノルウェー民俗博物館、スカンセン野外博物館なども、このときの見聞である。

渋沢は、帰国後、台湾の台北の博物館を見て、「およそ博物館は御申し訳や虚栄心で建てるべき筋合いのものではない。その国民全般の学問に対する真摯な尊敬こそ、博物館建設ならびにその利用の真の原動力であらねばならぬ」(渋沢、[1933]1992、24)としている。この言は、戦後、多くの博物館をめぐった後も変わっていない。「あちこちの博物館を見て廻つて、私の考えたことは、よい博物館があるから、そこの人間が立派になるというのではなく、国民の経済生活が良くなり、全体の民度が高まれば、そこにおのずからよい博物館もうまれるものだ、という平凡な真理である」(渋沢、1955、268)と述べている。「全体の民度」とは、人びとの生活文化ということだろう。

渋沢が博物館の設立にさまざまな形で関わったことについては、別に論じたいが、渋沢が戦前、戦後を通じて、治者の立場にたつて博物館を考えていたことは間違いない。博物館をめぐる渋沢の

社会的文脈、意識は、政治的な意味を含んでいる。

2) 植民地・台湾という問題

渋沢敬三が大学を卒業し、ロンドンでの研鑽を経て、1925（大正14）年帰国し、12月に横浜正金銀行を退社する。『柏葉拾遺』によれば、12月2日にはアチック復興第一回例会が開かれ、「此時分よりマテリアルカルチュア研究の方向に進み、民具蒐集に勉む」（中山、1956、柏葉年譜2）とあり、本格的に家業と研究の兼業体制が始まることになる。ところで、渋沢は、第一銀行に入行するまでの間、石黒忠篤と共に台湾米穀大会に出席するために1926年4月18日から5月2日まで台湾を訪れ、帰途5月2日から12日まで沖縄に滞在している。これが、渋沢敬三が自覚的に行った、初めての現地調査の旅とあってよいものだ。渋沢は帰京すると直ちに第一銀行に入行するが、一方で、旅行記を「南島見聞録」としてまとめ『竜門雑誌』に掲載し、後に自ら撮影した写真と組み合わせ、最初の著書『祭魚洞雑録』（1933）を構成している⁽¹⁾。文章と写真の組み合わせは、最初から考えたプランであろう。

この旅について福田アジオは、「渋沢は当時日本の植民地であった台湾を訪れ、各地を見て歩き、その帰途には沖縄に一〇日間滞在したことが決定的な意味をもった。（略）柳田国男、折口信夫など民俗学の先達はいずれも沖縄を訪れることで学問的に飛躍したが、渋沢も同じであった」（福田、2009、100～101）としているが、その理由について具体的に論じていない。私の仮説は、渋沢のこの旅の動機を中心にあつたのは植民地・台湾であり、実際に台湾の原住民に会ったことが渋沢にとって大きな意味をもったと考える。

この背景にあるのは、大正年間に刊行された臨時台湾旧慣調査会による調査報告書の存在である。『蕃族調査報告書』8冊、『蕃族慣習調査報告書』8冊、森丑之助『台湾蕃族図譜』2冊、『台湾蕃族志』1冊は、今日の研究からみて問題があるにしても、当時において世界的に通用する水準のものである。内容も台湾原住民の社会構成、土地所有の問題などを詳細に報告し、写真を用いた図譜も刊行しており先駆的な仕事である。

ところで、柳田国男はこれらの調査報告書に触れ、どう思っただろう。戦争中の1944年、調査報告書の調査員であった小林保祥の『高砂族パイワヌの民芸』の序によせ、「蕃族慣習調査会の大きな報告書が、二十冊近くも続刊せられたのは、既に四十年前の事である。自分も其際は壮年学徒の熱情を以て、片端からそれを読み通した者であるが、あの時ほど強く烈しく、興国の機運といふものに感銘したことは無かつた。我々内地人の隅々の生活に就いては、まだ一卷の調査報告書も出て居らぬだけで無く、めいめいの生れ在所の生活だけはよく知つて居るつもりでも、反省して見ると是と匹敵するやうな精密な見聞は、実は持合せて居る者は少ない」と述べ、調査報告書が刊行されていた時期、日本国内について、「まだ一卷の調査報告書も出て居」なかつたと自省をこめつつ振り返り、「私は之を劃然たる一時期として、日本の社会人類学は忽ち大躍進を遂げるであらうと、心の奥底から信じたのであつた。その期待は必ずしも裏切られては居ない」（柳田、[1944]1970、318）とした。当然のことながら、この言は、その後の民俗学研究の発展という事態を踏まえたものだろう。

一方で、渋沢敬三の反応は微妙に柳田の反応とは異なる。「南島見聞録」において、「隘勇その他の巡査諸君等の真に縁の下の力持式大努力によって出来た蕃族調査報告がある」とし、その内容を認めつつも、「今のところ充分なる学問と経験ある学者の研究はまだ発表なきが如く、また現在そんな学者は入り込んではおらぬと思う。我が父を殺された憤りを恩に代え一生を生蕃教化にと蕃地に永年住まわるる井上伊之助氏の行動は真に涙ぐましくも尊いことであるが、かかる諸君に人類学

や民俗学的研究まで期待しては期待する方が無理である。とにかく名前だけは世界に知っているが、学問的真相の闡明されておらぬこの民族に対しては、是非とも我々日本の学者によって充分なる研究をして頂き、日本人の手から世界の学界に最初に発表してほしいと切望する」(渋沢、[1933] 1992、63～64) としている。

明らかに、柳田の国内へと眼を向ける姿勢と渋沢の国外へと眼を向ける姿勢はベクトルが真逆である。台湾原住民を研究者が調査し、国外へ発信するという姿勢には、植民地の経営が順調であることを欧米諸国に広報するという統治者としての側面がある。これは、1945年に刊行されることになった“*The illustrated ethnography of Formosan aborigines*”に差し込まれた日本文「本書刊行に際して」(著者識とあり文章内容から鹿野忠雄によるものと推測される)においても共通する。「台湾に残存する原住民族は10種に余る。而して台湾島の地理的位置が然らしめる関係より、台湾の東南亜細亜民族学に於ける位置は極めて大であるに拘らず、世界に於ける民族学者が此の興味ある台湾に対して、我々を満足さすべき記述を行はしないのは、従来の探究の行届いて居ない事と、資料が日本文にて書かれた理由によるのである。我々は西欧学者の資料を自由に利用すると同時に、我々の資料をも進んで彼等に提供する義務あるを信ずるものである。之れによつて学問は進歩するものであり、我が日本の一方的利益を考へても此の見解は正しく、戦争の現段階に於ても之れは変るものではない」(Kano and Segawa, 1945, 付録1)。

植民地である台湾を日本人研究者が調査研究し、世界へ発表するという渋沢の言明は、約10年の時を経て、鹿野を援助することで実現する。しかしである、1944年という時期、敗戦をにらみつつ、渋沢は英文での著書を刊行することをどうして決断したのだろう。強い意思をそこに見いだすことができる。その判断は、それが実現するまでの過程を含めて極めて政治的である。

3) 台湾原住民と会う

ここで、渋沢敬三の台湾旅行の概要を「旅譜と片影」からみておこう。

台湾 米穀大会〔渋沢敬三、石黒忠篤、志村源太郎、井野碩哉、石崎等〕

神戸(扶桑丸)～～基隆[4月]22日---台北㊦(後藤文夫民政長官官邸。総督官邸-伊沢多喜男、大稲埕、市場、茶商、家鴨卵人工孵化場、農家大中小三軒、板橋 林本源邸等)---嘉義(軽便)---竹崎---独立山(スパイラル)---梨園寮(竹紙)---噴起湖---十字路(生蕃頭目一群に面接)---沼の平㊦(夜中生蕃の踊り)---嘉義㊦---番子田---烏山頭ダム(嘉南大圳、八田与一より案内説明さる)---番子田---台南㊦(大成殿、媽祖宮、農民の豊年踊り等)---安平(養魚池、ゼーランジア城)---台南---高雄㊦(港湾施設)---九曲堂(パインアップル工場)---高雄㊦---台中(製糖工場)---台北㊦(樟脳阿片専売局、中央研究所、百歩蛇、青竹蛇、植物園、博物館等)---草山㊦(官邸)---北投(ホクトライト産地)---台北㊦---基隆(港湾、珊瑚工場等) 基隆[5月]2日
(渋沢、1993、309～311)

台湾への旅は米穀大会への出席であるが、そこに目的があったわけではない。渋沢と石黒等は、大会を抜け出し、阿里山へと向かう。「扁松の原始林や生地の生蕃を見て、叶うことなら新高山[玉山]を一目なりとも拝みたいという念は、実は内地を出る時からの願いであった」(渋沢、[1933] 1992、32) という。

渋沢と「生地の生蕃」である台湾原住民との最初の出会いは、台北から嘉義へと乗り継ぎ、ようやく噴起湖の駅へと着き、構内をぶらついたときである。

図3 『祭魚洞雑録』39頁



てに口起噴 蕃山里阿

「いろいろの食料を売る家が一軒ある。豚や鶏の肉を細かに裂いて切り売りしている。(略)そこへ年齢のほど二十六、七、逞しい様子の生蕃が一人ヒョッコリやって来た。待ちに待ったお客さんが来たような気がして、一行皆ソレとばかり側へ寄って拝見しているが、少々恐いと見えて銀座で気狂いを見物するように遠巻きにしている。向うでも何がそんなに珍しいんだいといった顔付でこちらをジロリジロリと見るが、争われぬものでその眼は赤子の如く素直であると同時に獍猛な光を放っている。(略)同乗の広東人の子供をか

らかつては笑い、時々鹿爪らしい顔して、赤い太糸で頸からかけている内地の煙管で臭そうな煙草を吹かす。動作に極めて自然的な単純さと敏捷さとが見え、優良な猟犬にでもありそうな気分を発散している。彼が何を考えているか内容の仔細にあたっては無論解らぬけれど、おおよその気分は手に取るように見える。この点が本島人即ち支那民族の人々が従順にしてかつ圧迫に堪えると同時に、何処か薄気味悪くその本音のなかなか解りにくいのと大変違うところである。(略)生蕃の心境には自ら日本人と或る種の共通な意気を有するように考えられてならぬ。或る学者は人種を嗅覚で区別するが、同様に何となしに赤の他人種の心持が、こちらの胸に写るところに、人種的な差等の親疎が漠然ではあるが極めて無理窟に見出されるようにも思う。殊に生蕃の場合には、我々の祖先の持ったと同じような感覚や心構えや意気が多少とも見受けられる気がする。(略)これは人種学や人類学または民俗学上からの理窟ではない。何となくそういう気がするのである。故に理論的な証拠はない。が同時にこういった学問が、この何となしにの気持を馬鹿にすることも出来ないと思う」(渋沢、[1933] 1992、38～39)。

渋沢の台湾原住民(図3)に寄せる「生蕃の心境には自ら日本人と或る種の共通な意気を有するように考えられてならぬ」という親近感はどこからくるのだろうか。こうした親近感に対して、柳田は極めて慎重である。戦時期、柳田は民族学の隆盛を横で見ながら、民間伝承の学(民俗学)の立場から批判を加えている。まず、植民地において原住民と触れあい調査する時、最初に言葉の問題があるとし、「勉強すれば向うのインテリと話をすることもできるでしょうけれども、彼ら同士でしゃべっているのを傍で聞いておっても、何を言っているのなかなか判らない。それから通訳を介しない時代がきて、こっちから行った者の前に現われてくるのはかなり教養のある者で、われわれの知りたいのはむしろもう一つその底のものなんだから、これがたいへんむずかしい」とする。そして、さらに比較するとすると、調査する者が日本のことを知らなければならぬ。「私らの同胞にたいして抱いている熱意というものを、すぐに転用してちがった人種に持って行くということは困難なんです。われわれはまだ彼らの靈魂には触れていないからね」(柳田、[1943] 1992、83～84)。

戦時中、柳田は、渋沢が先導しつつある民族学に、控えめながらも距離を置こうとする。

「今は未開人の生活も既に甚だしく変遷して居る。其背後の経過を詳らかしようとするれば、先づ文明圏内の人々が、自ら反省によつて習得した技能を以て、比較の調査を進めなければならぬ(略)。し

かも我々の民俗学の歴史を一通り知つた上でないと、新たな同情深い観察には這入つて行けぬ」(柳田、1942、234)。

柳田のこうした言説は、渋沢の立場を浮き彫りにする。戦時期、渋沢敬三は渋沢家の家督相続人として、さらには第一銀行取締役、副頭取、日本銀行副総裁、総裁として日本経済界において重要な位置にあったことは論をまたない。また、日本民族学会の立ち上げに関わり、理事であり実質的なオーナーであったことも周知の事実である。渋沢は自ら判断したことが必ずなんらかの形で現実になることを識っていたし、良くも悪くも治者として自分の立場を自覚する必要がある。当然のことながら、渋沢の旅は個人的なものであっても個人的なものではない。渋沢は現地を視察する、あるいは調査するということがどういうことだったのか。さらには、どう現地を視察する、調査すべきなのか、治者としての方法論がそこに求められた。

4. 治者・渋沢敬三にとって調査とは何か

1) 統治と調査、その調査をめぐる政治思想

渋沢敬三は1926年4月、台南の嘉南平野一帯の水利設備である嘉南大圳と烏山頭ダム建設現場を訪れ、所長であった八田与一の案内のもと説明を受けている。この壮大な工事は、1920(大正9)年から1930(昭和5)年に及ぶものであり、渋沢はその工事の途中で訪問となる。台湾における植民地事業として高い評価を受けている八田の仕事であるが、渋沢の評価は厳しい。

「(台南大圳の) 大事業は大事業であるが果してあらゆる方面に、真に成功するや否や幾分疑なきを得ない。自分等にはこんな大きな仕事の計数はよく解らぬが、常識的に見て、この仕事に二つの大欠点があると思う。その一つは一つのダムを以て灌概せんとするにはその面積があまりに大であること、また一つはこれが幾多の地主に分割所有されていることである。(略) 当地方は土着せる幾多の福建人の業主が土地を細分している。果して彼等全部に満足を与え得るであろうか。仮に一步譲って多少の犠牲を構わないで敢行するとする。ところがそうすると自分のいわゆる第二の欠点がまた邪魔をしましまいか。即ち約八百万円を何年かにわたって人民に賦課して取得している点、これである。」

渋沢の批判点は、工事における八田の献身的努力、あるいは台湾の現地人と日本人とを分け隔てなく扱おうとした側面にあるわけではない。その土地における土地制度や習慣に十分に配慮していない点にある。

「どうもこの仕事が農業上の技術慣習、その他民政的方面の調査研究を幾分欠いているように思えてならぬ。土木的の調査は充分に行届いているであろう。水は溜るであろうし、またよく流れるに違いない。しかし多年土地と慣習とに結びつけられた本島人の業主や小作人の心持は、ただ一片の土木的技術や計算では左右出来るものではない。嘉南大圳の成功を真心から祈る自分は、これが総督府や組合幹部のみの成功に非ずして、利害関係本島人全部が手を打って喜び祝福し合うていの成功であることを切に切に望む者である。」(渋沢、[1933] 1992、46~47)

渋沢の批判の観点は、調査の不足、あるいは調査の結果が十分に生かされていないことが、ダムと水利設備を利用するさいに派生する問題への認識不足を生んでいるという批判である。この背景

には、大正年間に刊行された臨時台湾旧慣調査会による台湾原住民の調査報告書が十分に生かされていない現状があったと推測される。

日清戦争の結果、日本が台湾を領有することになり、統治をするために台湾総督府が設置されると、さっそく統治を効率的に進めるべく台湾の住民の人口構成、土地や家族制度、商習慣、民事の慣習法、その他さまざまな風俗習慣など生活全般に対する詳しい情報が必要となった。1901（明治34）年に臨時台湾旧慣調査会が設立され、大学の研究者も参加し、植民地の行政の政策づくりに直接関与する調査として、台湾の大半である福佬系住民の慣習法から始められ、1909年からは山岳地帯に住む台湾原住民に対する調査が始められた。台湾原住民に対する調査を実質的に指揮した大津麟平は、「法務においても行政においても旧慣を尊重すべきだという信念をもっていった」が、「当時、官僚や法官の多くが慣習法を軽視し、むしろ内地法延長主義に傾きがちであった」。なぜなら、「官僚たちにとって容易に理解できない旧慣をいちいち精査してきめ細かな行政を実行するより、「戦勝国ノ威ヲ以テ」、内地流の行政を強制する方がさしあたり容易であった」（関口、2014、22）からだ。

しかし、調査の問題はこうした植民地の統治行政の施策のあり方だけでなく、統治そのものの政治的正当性にも関わることになる。例えば、『番族慣習調査報告書』は台湾原住民の社会構成、土地所有の問題などを詳細に報告しているが、タイヤル族では「土地所有は村落の総有制に帰し、人びとは村落を統治する自立的能力をもっている」とされた。つまり、タイヤル族にとって日本人の台湾総督府は必要とされない。この慣習、習俗の自律性は総督府にとって邪魔なものである。「総督府にとっては、タイヤル族は自己を統治する能力がなく、それゆえに日本の支配を受けなければならない」（山路、2006、29～30）原住民だからだ。

渋沢の嘉南大圳とダムに対する批判は、こうした議論、調査報告が明らかにする原住民の習俗の自律性に対して、台湾総督府が調査を無視するかたちで統治を進めようとしていることを含んだものである。渋沢の治者としての立場は、こうした時、フランスの貴族であったモンテスキューなどの穏健な統治論に近い。モンテスキューは非西欧社会の異民族の視点から慣れ親しんだヨーロッパの社会、文化を相対化し、批判する。これはそのまま異民族の視点から自国を考えると、民族学のスタンスでもある。モンテスキューは各国の法と政治の大規模な比較を通し、「風土、宗教、法律、統治の格律、過去の事物の例、習俗、生活様式。こうしたものから、その結果である一般精神が形成される」（Montesquieu, [1748] 1989, 158）とし、君主に一般精神に従うように求めた。そして、法律は立法者による制度であり、習俗や生活様式は国民一般の制度であるから、「習俗や生活様式を変えようとするときには、法律によってはならない」（Montesquieu, [1748] 1989, 167）とし、法律に対する習俗の相対的な自律性を要求した。それは自然的不平等に対し、法的平等を打ち立てるために確かに統治が必要とされることを認めつつも、そうした統治の君主の絶対性に対して、人びとの習俗の相対的な自律性を主張するものであった（王寺、2014）。フランス啓蒙思想において、こうした人びとの習俗や生活様式の自律性を認めることが、君主に対する市民革命の一つの根拠となった。

男爵・モンテスキューのこうした政治思想は、支配者層である貴族として君主の権力を抑制しようとするものであったが、結局それは貴族としての自らの立場をも掘り崩し解体させる思想的な力をもっていた。自らの権力によって、自らの権力を葬りさるという治者の精神、矜持そのものであった政治思想は、時を経て、日本の敗戦後、植民地的占領から離脱するために自ら渋沢財閥を解体し、ニコ没（ニコニコ没落する）を自認した子爵・渋沢の精神のありようと共鳴しあうことになる。

2) 治者にとっての調査方法—ラピッド・サーベイというやり方

ここで、もう一度、渋沢敬三が台湾原住民と会った文章に戻ってみよう。渋沢は、彼らに「我々の祖先の持ったと同じような感覚や心構えや意気が多少とも見受けられる気がする」とし、「これは人種学や人類学または民俗学上からの理窟ではない。何となくそういう気がするのである。故に理論的な証拠はない。が同時にこういった学問が、この何とはなしの気持を馬鹿にすることも出来ないと思う」（渋沢 [1933] 1992、38～39）といている。

「この何とはなしの気持」を大切にするという感覚には、何があるのだろうか。言葉や習俗、習慣も違う異民族に対して、民族学にはこうした感覚が必要なのだろうか。多分、渋沢敬三にとっては、研究的な態度というより、もう少し幅広い日常生活の方法であった。敬三が一個人ではなく渋沢「家」の後継者になるにあたって、さまざまな人びとの思惑、裏表のある態度といった人間関係に日々接するなかで求められたのは、人の何気ない言葉や態度、行動を見逃さない観察力であり、注意深さであった。それは身を守る用心深さでもあるが、全体のバランスを見誤らず、大局的に物事を判断する力でもある。つまり、渋沢家の後継者となることは私人から公人になることであり、財界人として社会的に活躍するにあたって、少ない時間でさまざまなことを判断していくために、人と人との関係に対して注意深くあるだけでなく、ある集中力をもって物事に接することが必要とされてもいた。

渋沢敬三は映画を撮影する時、『イタヤ細工 製作者 渡部小勝君』（1934）のように何を撮るか分かっているものに対して、その制作過程全体を概観し、その手順を分節化し、その局面局面においてどこから撮影したらより分かりやすいフレームになるのか、またそれをどうつないだらよいか事前に想定しながら、構成して撮影することができた。渋沢の物事の捉え方は理知的であるだけでなく、構成力をもっている。しかしながら、旅に出た時の映像は不安定でカメラはあちらこちらと彷徨い、一見すると素人の下手なカメラワークに見える。多分、それは渋沢のさまざまな物事に反応し、注意を向ける意識そのものの表れにすぎない。渋沢が人びとに声をかけ、その反応を撮る時、ちょっとした仕草や物腰、態度に現れる個人性に目をとめ、フィルムに定着しようとする。渋沢は物事の表層に漂うイメージを掠め取るように、カメラを動かす。

短い時間で大局的に見誤らない注意深い観察によって、物事や人びとの日常生活を大まかに掴まえていく。それは財界人として日々求められるものであり、同時に、二足わらじで、少ない時間で研究をする者にとって、必要な方法論でもある。東京に住み財界の中枢を担う渋沢にとって、植民地を含む日本各地に行きその現場を視察する、あるいは調査をするには、段取りよく無駄なく時間を使い合うべき人に会い、行くべき場所に行く必要がある。鉄道、車、船を組み合わせた旅の進め方は、第一銀行の地方の視察旅行と、研究のための現地調査の旅行とで基本的に差はない。それどころか、第一銀行での視察旅行における人脈の形成は、後にはそのまま研究の現地旅行における協力者の人脈にもなっている。

ところで、アチックミュージアム中期、渋沢栄一死去後、1932年1月から5月まで渋沢敬三は伊豆の三津で病氣療養をし、そこで内浦古文書を発見する。その文書群は内浦旧六カ村（重寺・小海・三津・長浜・重須・木負）の津元である長浜の大川四郎左衛門（屋号大屋）・三津の大川文作・重寺の秋山晴一・小海の大沼健作・重須の土屋莊平・長浜の大川次郎（屋号北方）・三津の金指勝見の資料である。その資料群の整理、翻刻作業を祝宮静が中心になって行ない、渋沢敬三編『豆州内浦漁民史料』上巻（1937. 8）、中巻之一（1938. 5）、中巻之二（1938. 12）、下巻（1939. 12）として刊行される。その資料群の内容の中心は、内浦湾で行われていた漁場制度、大網漁業がどういう慣行によって運営されていたかを明らかにするものであった。漁場の慣行は漁業権として、すでに

江戸時代から売買譲渡されており、こうした漁場制度のさまざまな社会的、経済的あり方を、一つの地域のなかで、約 400 年にわたってたどることができるまとまりをもった資料である。資料発掘の翌 1933 年にはアチックミュージアム内に漁業史研究室が設置され、社会経済史関係の研究者が入るようになる。渋沢が感じていた「社会経済史的」研究の不足が是正される方向で展開し始める。また、『豆州内浦漁民史料』という大きな資料群、積み上げられた文書類によって、アチックミュージアムは調査対象地を山村から漁村へと移すことになる。その文書類（モノ）は、渋沢が視点を山から海に転移させる根拠となる。

渋沢は鳥瞰的に日本全土が海島としてあることを顕在化させ、フィールド化させようとする。まさに、鳥瞰的に調査をするために、さまざまな領域の研究者を一つの船に集め、島々を巡航し、「多数の人の目で、比較的短時間に、できるだけ広い地域を、ザットでもみる、いわゆる rapid survey の方法」（河岡、1973、1061）を実際にやってみる。この調査方法は実業と研究の二足わらじを履き、潤沢な資金をもつ渋沢の状況、立場にみあったものであった（丸山、2013、63）。

渋沢はラピッド・サーベイの方法について、1937 年 5 月 14 日から 22 日までの瀬戸内海島嶼の調査報告書で、「もとより一つの島への上陸時間は短くて四、五十分から長くて三時間ぐらいである。各人各様に採訪する。島の相手もまず行き当たりバッタリで、特にこの人と目指す余裕もない」とし、「雑然としていて内容に厚味のないこともまたやむをえぬところである」とする。鉱物学者の採集に倣って言えば「全くの露頭採取の範囲を出ていない」ものであるが、「雑然とはしているが一人や二人では気をつかぬ範囲に及んでいる。これらの標本を整理して更に第二段としてある種の事柄に対し深く掘り下げるのはこの後に来るべき仕事である」という。けだしもっともな意見ではあるが、「それでも今回の旅で、わかりきっているような気のしていた事柄を実地に当って初めて感得できたことも多かった」と述べ、「瀬戸内海の島々の文化の古いこともしみじみ感じ」、「島の生活と中国および四国の二大対岸との交渉において、そのあらゆる面に歴史的地理的経済的社会的関連が深くかつ複雑に結び合っていて、十分な科学的分析と総合を行わない以上、表面の観察や僅少の資料では何も知解できぬ感を深くした」（渋沢、[1940] 1992、276~277）とする。渋沢は、この調査をした後、自ら調査しようとするわけではない。重要なのは、渋沢がアチックミュージアムのプロデューサーとして、この後どういう調査が必要で、同人、あるいは研究者の誰を派遣して調査させるかを間違えずに判断できることにある。

ところで、この瀬戸内海島嶼の調査報告書を読んだ柳田国男は、「私はもと船長を一生の志望にして居たことも有る男なのである」と語り、「日本は海から近よつて行かなければならぬ仕事に際限も無く多く、又ちつとも手が届いて居ない国なのである」とし、「一番その必要を痛感して居る民俗学が発起人になつて、地学・社会学・生物学その他、少しでも関心のありさうな人をさそひ合せ、ぐるぐる航海してあるく研究所をこしらへたら、どんなに楽しいであろう」と思っていたとする。柳田はそう考えていたので、渋沢の島嶼の旅の調査は正直「やられたなと思つた」という。ただ一つの欠点は、「携はつた人たちがあまりにも忙しく、陸上の羈絆があまりにも太くて、多い時間をこの為に割くことができず、僅かに島の土を踏んだかと思ふと、もう出帆といふようなせはしない訪問をして居たこと」（柳田、[1949] 1968、490~491）だと、短時間にザットみるやり方を批判している。これは、総合調査においても、十分に時間をかけ見聞を尽くそうとする柳田の考えを示すものだろう。

柳田と渋沢との採訪調査の違いが見えてくる言説ではあるが、一方で、二人にある共通した指向、認識があったことも思わせる。渋沢は、大学の 1、2 年生の時、大正 7、8 年頃であるが、柳田より糸満人の話を聞き、「彼等が小さな刳舟に乗って、鹿児島は勿論、時とすると土佐、紀州

を経て最北金華山沖まで北上したことがあるのを知って、非常に驚いたと同時に、民族移動が海上必ずしも陸上に比して稀ならざるに非ずやという暗示を得て、興味深く覚えた」（渋沢、[1933] 1992、100）という。柳田は、その後、1920（大正9）年に沖縄を訪れ「糸満の船の話」を書いており、柳田の関心は一貫していたといつてよい。小林は、柳田と渋沢との関係を跡づけ、渋沢は柳田の糸満人への関心に触発され、石垣島で糸満人の「タターチャ」と呼ぶ漁獵を実見したことが、その後の研究の方向性を決定づけたとする（小林、2013）。

興味深い議論である。柳田と渋沢は、日本をどう捉えるのかをめぐって、その構想力を交差させているからだ。柳田は、渋沢の島嶼調査に触れ、「瑞西に寂しい朝夕を送つて居た頃、私が頗りに夢を描いて居たのは、海を学問の舞台にして見たいといふことであつた」（柳田、[1949] 1968、490）という。ここで実証することはできないが、一つのロマン（仮説）を描いてもよい。ロンドンで、柳田が渋沢に「海から日本を見たら、どんな風にみえるだろうか」という話を語ったことを。

渋沢は、「南島見聞録」の最後をこうしめくくっている。台湾に「最初に入ったと思わるる生蕃はマレイ人種であり、支那民族より遠隔の地より来たものらしい。紅頭嶼〔蘭嶼〕のアミ族はポリネシア系統である。大祓にある「しなどの風」は支那方面即ち南から北へと吹く。糸満は琉球から金華山へ訳もなく漕ぐ。「しなどの風」に乗じ「天の橋立」を操って北上した糸満人は幾人でもいたであろう。或る者は台湾へ残ったであろう。或る者は琉球に残ったであろう。或る者は日向へ、または高天原へ着いたであろう。」渋沢は民族の移動を島づたいに描き、「生蕃も琉球民族も何れもマレイ種を基幹として、更に各種の人々を取り入れつつ北上した、我が大和民族の遠き昔の遺れがたまではあるまいか。自分は何故かそんな気がしてならぬ。台湾に往って生蕃に遭い、また琉球へ廻って各種の事物を見聞して、鹿児島に上陸した時、悠久な民族史の順序に従って歩いたような気がした」（渋沢、[1933] 1992、107～108）と自分の旅を総括する。

渋沢は海からみた日本を「我が日本島帝国」（渋沢、[1933] 1992、108）という。もちろん、それはユーラシア大陸の西の果て「イギリス島帝国」を意識したものだったかもしれない。治者であった渋沢にとって「島」という地政学は、「帝国」の運命と不可分に関わっている。

5. 調査の構想と記録映像の実際

1) 映像から見たラピッド・サーベイ

ところで、さまざまな研究分野の研究者が集まって、短期間一緒に調査するというラピッド・サーベイの方法はどういったものであり、どういった問題をかかえているのだろうか。ここでは、映像を調査にどう使っていたかという局面から考える。

アチックミュージアムの後期は、こうしたラピッド・サーベイが積極的に試みられた時期であるが、その最初の試みは1934年5月12日～22日の薩南十島の調査である。この調査における映像メディアの利用状況を確認しておこう。まず、写真であるが、現在神奈川大学日本常民文化研究所（以下、常民研）に残されている写真をみると、基本的には35ミリフィルムによるもので、撮影者は渋沢敬三、江崎悌三、大西伍一、桜田勝徳、高橋文太郎、竹内亮、谷口熊之助、早川孝太郎、三宅宗悦、村上清文の10人である。基本的には、個人が所持するカメラであり、また何をどうとるかについては、個人の考え、判断によっており、写真はかなりばらばらで、統一されているわけではない。渋沢の言うように時間のないなかで、「行き当たりバッタリで」写したものであり、「雑然としていて内容に厚味はない」（渋沢、[1940] 1992、276～277）。

こうしたばらばらな写真（映像）を、どう統合するか。現実的な考え方は、写真のサイズや撮り

方などを問わず、その写された内容だけで考えるという方法を徹底化することである。当然のことながら、写真の多層的な構造には目をつぶり、写されているものの意味を一義的に絞り記号化する方向であり、当然のことながら標本的な写真になる。そのかわり、写真を、調査報告書や本などの文章と一緒にして載せやすい、使いやすくすることができる利点がある。

一方で、映画の方はどうであろうか。16ミリの撮影の中心は渋沢敬三であり、9.5ミリの撮影は宮本馨太郎とあってよいだろう。映画において、16ミリは編集され、タイトルを付けられ作品化されているが、9.5ミリは島ごとにばらばらになっており、薩南十島として一つの作品としてまとまっていない。

ところで基本的には編集されているということは、上映を前提にしていたことを示す。この薩南十島の探訪記録映画である『十嶋鴻爪』（1934）の上映の記録は特にないが、1935年12月4日に「帝大社会学研究室に於いて三面村、桑取谷、十島、東北地方のフィルムを映写す」（アチック、1935、24）とあり、アチックミュージアム以外の場所で上映が行われていたことは分かる。なお、宮本の硫黄島の映像は、『鹿児島県下硫黄島の太鼓踊』として、『オール・ニッポン（珍しい出来事の映画）』第三輯に収録され全国各地のパテーシネマで上映されている（パテーシネマ、1935、84）。16ミリが研究的な場所で、9.5ミリがパテーシネマというアマチュア映画の団体で、それぞれ別個に上映されていることは、薩南十島の探訪記録映画の社会的文脈、位置や意味するものが必ずしも同じでなかったことを示す。

ここで、映画『十嶋鴻爪』がどう編集されているかをみてみよう。映画は、アチックミュージアム中期に盛んに試みられた「声かけ」の技法による、日常生活の自然な姿をなるべく写そうとするやり方は影を潜めており、文字タイトルがパターン化されていることが分かる。例えば、実際のタイトルでみると「硫黄島にて」「硫黄島の勇姿（舟より見た）」「硫黄島所見（学校で祭の踊りを再現）」「硫黄島民具二三」といった具合に整序されており、ほほどの島でも同じように編集され、繰り返されている。ここでの利点は、比較のしやすさにある。しかし、この方法は、映像を画一化し、細部を際立たせる映像の力を半減させ、魅力を失わせるものでもある。結果的に、映像を研究の枠内に押し込め、挿図とほとんど変わらないものにしてしまう。こうした方向性は、写真の時と同じような共通した意図、記号的に映像を扱おうとする意識の表れともいえる。

つまり、ここで留意されなければならないのは、渋沢敬三が薩南十島の映画を撮る時に、思ってもみないものを写し取る映像の偶然性より、島々の比較を前提とした内容を重視した構想を採っていたことにある。ここには映画全体のプロデューサーとして、作品の方向性、コンセプトを画定し、それに従って映像を写すことが意識され指示されており、実際に撮影する人間が渋沢敬三自身でなくてもよいことが認識されている。つまり、プロデューサーとして映画全体をコントロールできれば、撮影者は複数であってもかまわず、かつ、そのフィルムの編集も必ずしも自分自身が直接タッチしていなくてもかまわないことが理解されていた。実際にカメラをまわし撮影することで、何事かを発見することは、プロデューサーとしての自らの位置づけのなかで、退けられたともいえる。

しかしながら、編集した映画を見て、渋沢敬三のなかで不満があったかもしれない。こうした方向性とは違った写真と映画の使い方が模索されているからだ。村上清文はラピッド・サーベイの短期調査の欠点を補うべく、1934年11月から1935年9月にかけて、三面に長期調査を行う。その成果として、長期滞在によって三面の人びとの信頼関係のもと制作された映像記録は、宮本馨太郎の編集協力を得て（宮本瑞夫、2002、113～114）、『越後三面の記録 第三篇剝舟の製作 第四篇狩猟』として、1936年4月東京人類学会・日本民族学会第1回聯合大会で上映される（日本民族、1936、254）。この映画は、記号化された挿絵的な映像ではなく、長期滞在による日頃から慣れ親

しんだ者の目線による日常生活の記録をめざす、一つの方向性を示す作品であるからだ。

ところで、現在、常民研に残された村上の三面の調査の写真から類推するに、どうやら映画だけでなく写真との組み合わせによる調査記録ができないかということ渋沢敬三は期待していた可能性がある。しかし残念ながら、村上は映画の制作だけで精一杯であったらしい。

こうした状況のなかで、1936年12月2日アチックミュージアムの例会に鹿野忠雄が出席し、渋沢は、鹿野の紅頭嶼の話聞き、海の民である紅頭嶼ヤミ族の調査を行うことを決める。しかもそれは、映画と写真を組み合わせた新しい調査記録、民族誌として、海外に発信することを最初から意図したものであった。

再び、渋沢の言を聞こう。台湾に「最初に入ったと思わるる生蕃はマレイ人種であり、(略)紅頭嶼〔蘭嶼〕のアミ族はポリネシア系統である。(略)生蕃も琉球民族も何れもマレイ種を基幹として、更に各種の人々を取り入れつつ北上した、我が大和民族の遠き昔の遺れがたみではあるまいか。」この「悠久な民族史」(渋沢、[1933] 1992、107~108)を映像によって分かりやすく視覚化する、そんなことができないだろうか。この構想力には、政治・社会的文脈が繰り込まれていることに、再度、注意する必要がある。

2) 『パイワン族の採訪記録』—映画と写真が交差する地点

ところで、渋沢敬三の高所から鳥瞰的に考えた構想が、実際の現場では、どう実現したのかをみてみよう。ここで、再び、当初の構想は、紅頭嶼で映画と写真とを一緒に撮るものであったことを確認しておこう。しかし、映画は『パイワン族の採訪記録』となり、写真は“*The illustrated ethnography of Formosan aborigines*”となった。これは、急の変更であった。鹿野はパイワン族の調査を行ってはいるが、紅頭嶼のように詳しくはない。当然のことながら、既にある臨時台湾旧慣調査会の調査報告書などを参考にしながら、台湾到着後、現地の警察などに連絡をし、段取りをしていったものと考えられる。

ここで、映画の内容を文字タイトルを抜き出して、たどっておこう。「台湾高雄州潮州郡下パイワン族の採訪記録 昭和十二年」「隘寮溪」「パクヒョウ 三月二十六日」「パイルス 三月二十六日」「マカザヤザヤ 三月二十七日」「タラバコン付近 粟播きの準備 三月二十八日」「下パイワンへの途上 パイルス マカザヤザヤ タラバコン を顧る」「下パイワン 三月二十八日」「昭和十一年 下パイワンの一部 約五十戸が 山脚へ移住した」「笠(リナイ)の製作」「ピューマ 三月二十九日」「紡織作業」「簞の製作」「クワルス 三月三十日・三十一日」「頭目の家」「甘藷畑」「狩の仕度」「踊り」「カピヤン 四月一日・二日」「竹籠の製作」「里芋(バサ)の植付」「泉(タタン)」「火干芋(アラジ)の製造」「林辺溪」「ライ 四月五日・六日」「食事」「祈禱者 パラジヤイ(男) プリガオ(女)」「終 アチックミュージアム」

ざっと見て「笠の製作」「紡織作業」「簞の製作」「竹籠の製作」などの民具に関わる映像が多いことは分かる。また、日常生活を構成する被服や装身具などが、文字タイトルには出てこないが宮本馨太郎の専門領域ということもあり、丁寧に写されている。さらに「頭目の家」といった家屋に関わるものが、日本との違いもあり同じように注意深く写される。生業に関わるものとしては「粟播き」「甘藷畑」「火干芋(アラジ)の製造」、さらに儀礼を含んだ「狩の仕度」「踊り」、宗教的なものとして「祈禱者」などが目につく。この映画全体を通して見ると、台湾原住民の日常生活が、ある程度まんべんなくわかるように構成されていることが分かる。

ところで、この映画で興味深いのは、家屋の内部の映像が写真によって写され、映画の編集段階で、その写真を映画に取り込み挿入している点である(図4)。つまり、映画を撮影する段階で、

図4 『バイワン族の探訪記録』の写真使用シーン



映画：頭目の家室内 (No.20 0:28:07)



写真：目録番号ア-072-010-001



映画：林辺溪 (No.20 0:41:41)

※フィルム No. とタイム表記については、本叢書「神奈川大学日本常民文化研究所が所蔵するアチックフィルムタイトル一覧（アチックフィルム関連）」を参照。



写真：目録番号ア-073-002

室内は暗いので光量不足で写らないことを前提に写真で補うことが決められていたことになる。室内の写真は、パイルスの家屋室内2枚（目録番号ア-074-011、ア-074-013）、クワルス頭目の家室内3枚（目録番号ア-072-010-001、ア-072-012、ア-072-016）である。それとは別に、カメラのレンズの都合で遠景の映像が十分に撮ることができないため、林辺溪の遠景も写真（目録番号ア-073-002）が使われている。なお、この写真は3枚を継いだものである⁽²⁾。

短期間で内容を過不足なくまとめるために、鹿野と宮本、小川の3人が知恵を絞って現地で映画の内容を決め、構成していったことは間違いない。特に撮影、編集する宮本にとって、台湾原住民を知る鹿野の知識と現地での手配は重要なものであった。一方、鹿野にとっては、宮本が映画が出来る前から全体を想定して構成したうえで、各シーンを組み立て、さらに各シーン内において、どう映像を写すかを考えていることにある種の驚きがあった。鹿野は、宮本が映画を作る過程に同伴することで、こうした映画的な手法を学び、民族誌として写真を撮るためにはどうしたらよいかを知ることになる。

3) “The illustrated ethnography of Formosan aborigines”における記録映画的手法

渋沢敬三は、“The illustrated ethnography of Formosan aborigines”（図6）の再刊にあたって、「本書は鹿野博士の記録の心を示す」ものであり、その写真は「説明補助の挿絵的でなく、当時としては極めて斬新な記録映画的な方法をとられた」（渋沢、[1961] 1992、318）と記している。当然の

ことであるが、この「挿絵」ではない「記録映画的な方法」による映像民族誌は、鹿野が最初からとっていた方法ではない。鹿野がアチックミュージアムに関わることで創発したものである。ここで、鹿野忠雄のヤミ族の船をめぐる書いた3つの論文から、その変換点をたどってみよう。

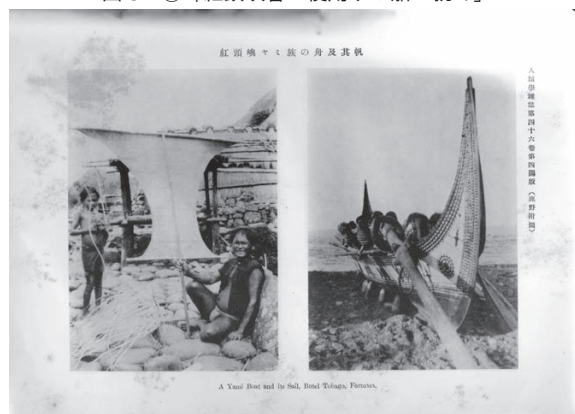
- ① 「ヤミ族の船に就て」『民族』3巻5号、1928年
- ② 「紅頭嶼蕃の使用する船に就て」『人類学雑誌』46巻7号、1931年
- ③ 「紅頭嶼ヤミ族の大船建造と船祭」『人類学雑誌』53巻4号、1938年

鹿野は①論文で、「台湾の諸蕃族を山岳の生活者とすれば、ヤミ族は海的生活者」として、「曾ては、他の蕃族が乗つて来たであらう船は、彼等が山の生活に変転した頃から、見捨てられたであろう」（鹿野、1928、99）とし、ヤミ族の船はかつて存在した海上の道をたどる重要な手がかりとなると指摘する。その上で、「船の構造」について詳細し、体験した「船祭り」について記述している。さらに、②の論文では、「船の構造」を細説し、その構造を有する船が「亜弗利加の東海岸より亜細亞大陸の南辺を過ぎ南太平洋に広く分布するもの」（鹿野、1931、269）だと指摘する。これはそのまま、渋沢の海島をめぐる民族史の構想と重なる議論である。

鹿野は③の論文では、現在の紅頭嶼の船が漁撈のためのものであることを述べ、さらにその漁撈組織が「主に一の血族より成る10組の家族が一の漁業団体を組織し、共同の漁撈に従事し、等分の分け前に与か」っていることを明らかにし、その各漁業団体が彫刻を施し船体を裝飾する大船を、「6月（Pipirapira）に起工し8月（Pugakau）に竣工し、盛大な船祭を行」うこと、そしてその「大船の新造は凡そ6、7年に1回」のことであるとする。鹿野は「1927年より紅頭嶼の生物地理学的研究に10回渡島し、340日を同地に滞在して居るが、昨夏6月より10月まで同島に起居、幸にも久しく待望して居た大船の建造と船祭を終始、然も4回（偶然にも4の蕃柱に於て行はれた）に亘つて観察し得た」（鹿野、1938、127～128）とする。

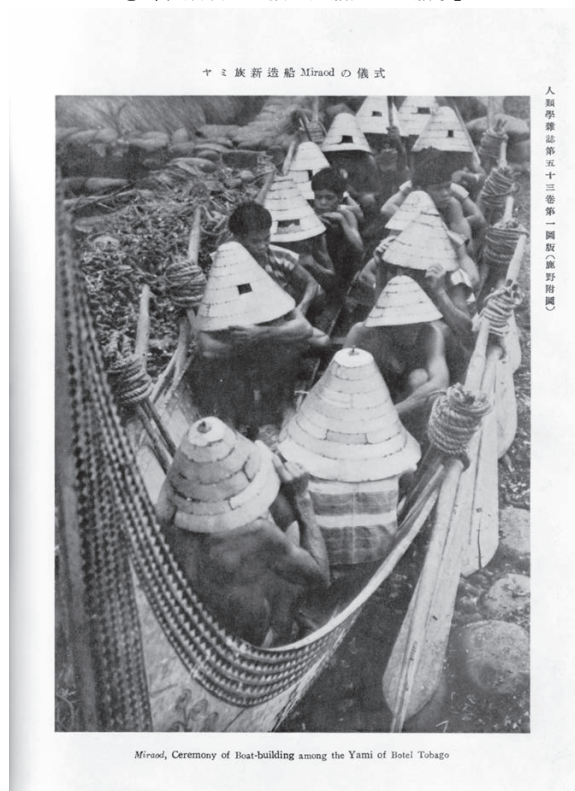
ここで、論文に掲載された②と③（①は写真不掲載）の写真の違いに着目する（図5）。②は普通の記録的な写真であり挿絵的なものであるが、③は明らかに儀式の全体の過程の1枚として写されていることがみえる。写真を映画のように写している。現在、神奈川大学日本常民文化研究所に残されたアチックミュージアム

図5 ②「紅頭嶼蕃の使用する船に就て」



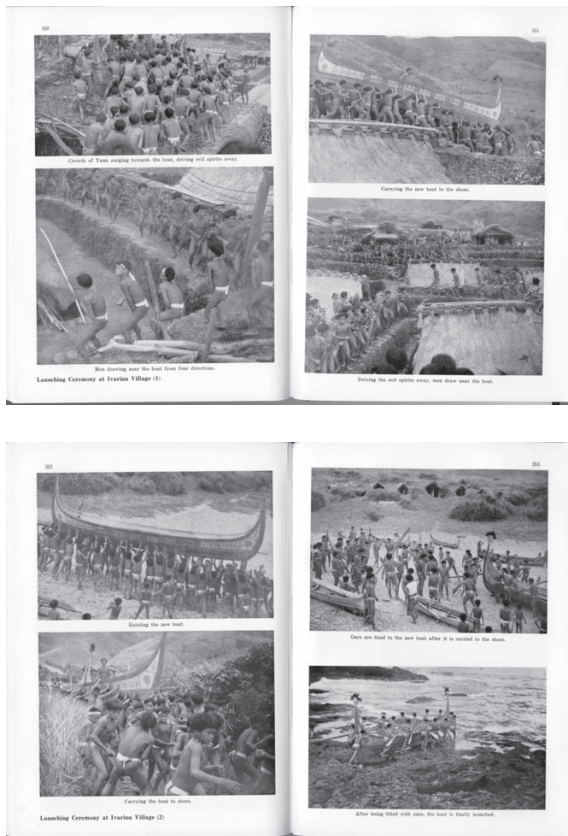
『人類学雑誌』46巻7号

③「紅頭嶼ヤミ族の大船建造と船祭」



『人類学雑誌』53巻4号

図6 “The illustrated ethnography of Formosan aborigines”



pp. 350~353

偶然かもしれない。しかし、映像による民族誌（モノグラフ）を創りだそうとしていた渋沢敬三、あるいは宮本馨太郎にとって、一つの天啓であり、その現場が植民地・台湾であったことは一つの限界線でもあったのだ。

現在、あるいは当時においても、台湾原住民は南島語族に属する言語を母語とし、南アジアから南太平洋に広がる民族の一つであることは間違いない。日本民族との違いは明らかであったが、渋沢は台湾原住民に「各種の人々を取り入れつつ北上した、我が大和民族の遠き昔の遺れがたみ」（渋沢、[1933] 1992、107）を見出そうとし、鹿野は「身に檻縷を纏ひ我々と異なる住居に住み、奇異な食物を口にすると、其の精神的內容こそ最も大切であり、東亜の美風の或るものは、却つて彼等の間に保存されて居る」（Kano and Segewa, 1945、付録1）とした。そこには研究的なロマンや、原住民に対する親縁性や共振するものがあつたことは間違いない。しかし、こうした言説に政治的な文脈があつたこともまた確かなことであつた。

戦後、1956年に台湾を訪れた渋沢敬三は、金門島で米ソの冷戦構造のなか二つの中国の対立という現実を前にし、台湾大学で戦前の日本の研究者の遺産が生きていることを確かめ、感を新たに、研究費を寄付したことなどを語つたが、かつての民族のロマンについて触れることはなかつた（渋沢、1956、12）。

の写真と、国立民族学博物館に残されている鹿野の写真を見ると、1937年3月～4月に宮本らと一緒にパイワン族を採訪した時、鹿野が写したと考えられる写真には、特にそうした特徴はない。

1937年6月から10月、鹿野は再び訪れた紅頭嶼で船祭りを4回体験することになる。つまり、船祭りの全容を写真でどう構成し、表現するかを試行する機会を得ることができた。そして、よく熟慮した上で、宮本の映画の撮影の仕方のように、全体の儀礼を見渡しなが、一連の行為一儀式を分節化し、さらに各分節化した内容ごとにまとめながら、一つの連続的な動きとしてイメージし、映画的に写真を再構成する方法を鹿野は創発することになる。鹿野はそうした意識、イメージのつながりを重視することで、外から客観的に記録するのではなく、自身もヤミ族の人びとと一緒に、船の建造と船祭りの過程に参加しつつ、かつそれを記録する視点を見つけ出すことに成功する。

これは、当初の構想であつた映画と写真を統合することができなかつた失敗が生み出した、

6. 占領からの脱却 ―治者として渋沢敬三は何をしたか

1) 漁業制度改革という実践

渋沢敬三が第一銀行を辞め、日本銀行副総裁になったのは1942年3月のことであった。その後、1944年3月に日本銀行総裁となり、敗戦後の1945年10月、幣原喜重郎内閣の大蔵大臣に就任し、1946年5月に辞任するまで、戦争遂行のための経済運営と敗戦によるその後始末を4年間にわたって行っていたことになる。渋沢は日本銀行総裁になった頃には、日本が負けるだろうことは予想がつく状態であった。その頃のことを回想し、「何もしつかりしていたのじゃない。しかし全体としてはだめだということを想像できたけれども、だめだと言えない位置にいたし……。だめだということはわかつておつた。」(渋沢、1974、312)と言う。渋沢は総力戦下、権力が集中するなか治者として、敗戦の後始末をどこかで覚悟していた、あるいはそれゆえに大蔵大臣の役目を引き受けたというべきである。彼は占領下においても、治者であることの政治的・社会的責任を自覚している者であった。

1945年10月、GHQは幣原喜重郎内閣に、憲法改正を示唆し、婦人解放、労働組合結成の奨励、教育の自由主義化、秘密警察などの廃止、経済の民主化の五大改革を指令する。その指令に従うようにして、治安維持法の廃止、財閥解体、選挙法の改正、労働組合法の制定、農地改革、六・三・三・四制の実施など、さまざまな改革が実施されることになる。渋沢は大蔵大臣として経済の民主化に関わることになる。

財閥解体は、GHQ経済科学局長レイモンド・C・クレーマーが中心になって進め、大蔵省は関与していなかったと渋沢は述べているが、「ぼくは財閥解体は、腹の中で不賛成じゃないのです。あれは日本としてある意味で解体すべきものだと思つておつた。(略)日本の財閥の行き方自身があまり好きじゃなかつた。これは祖父の伝来の気分かも知れない。」(渋沢、1974、331)とする。そして、実際に三菱財閥の解体のために、熱海で病氣療養中であつた岩崎小弥太に会い説得している。また、自ら渋沢家も財閥として、解体する。さらに、1946年2月17日には金融緊急措置令として貯金封鎖、新円切り換え、さらには財産税の徴収を大蔵大臣として立案している。渋沢は、占領期、明らかに改革推進派であつた。

また、農地改革においてもそれを進めることに賛成し「若しあれがなかつたらね、今、大地主なんかで生きてる人はないでしょう。殺されちやつたでしょう、小作人に」とする一方で、同時に村における地主の果たしていた役割に触れ、改革が「結局機械的過ぎましたね。時間が短かつた一用意がない」(渋沢、1963、14)と、微妙な意見を述べている。農地改革はGHQにとって、十分研究され準備されたものであつたが、アチックミュージアムで山村や漁村の調査や研究をしていたものとしてみれば、やはりそこに足りないものがあつたのだ。

農地改革の基本方針は、小作農を自作農にする、直接生産する農民に土地を与えるというものだったが、漁業において同じようにすることは実態とあつていなかった。そこで、GHQの天然資源局(NRS)は、1946年5月には漁業制度を改革するためにその実態を調査することを指示した(中野、2013、64)。渋沢は大蔵大臣を辞任していたが、当時農林省次官であつた笹山茂太郎は渋沢の人脈にあり、こうした調査・研究を積極的に予算化する(漁業、1983、10)。

漁業制度改革をめぐる調査・研究は、占領期に新たな漁業制度を設計するために集中的に行われたものであつたが、戦前からの2つの大きな流れを中心に展開する。一つは羽原又吉やアチックミュージアムの水産史、漁業民俗学の流れであり、二つ目は、京都大学の蜷川虎三、岡本清造の水

産経済学の流れである。この流れは東京大学の農政学者近藤康男などと一緒に水産研究会を結成し、さらには後に漁業経済学会へと発展する。渋沢敬三は戦前からこの2つの流れ、人脈に関わっていた。

漁業制度改革は、渋沢敬三の考えをよく知るものによって調査が行われ、その結果をもとに、既に存在するさまざまな漁業慣行、習俗の相対的な自律性を認め、それを反映した新しい漁業法が立案された。その内容は旧来の漁業権が消滅させられるが、農地改革とは異なり個々の漁民にその漁業権が交付されるのではなく、新たな免許をそれまでの漁業会を解体し新しく組織された漁業協同組合へ発行する。また、旧漁業権を消滅させた補償として漁業権証券を出し、その代わりに免許料・許可料を取るというものであった。

ところで、旧漁業権の約180億円の補償が政治的な理由で1951～1952年に一挙に行われることになり、漁業協同組合は経済的な基盤を得て、現実的なものとなった。マルクス経済学者であった水産研究会の近藤康男、岡本清造らは、補償金だけでなくさらに支払うことになる免許料・許可料をファンド化し、それを基に新しい漁業と協同組合を展開しようともくろむことになる。しかし、これは漁民たちの反対によって潰えさり、莫大な補償金も港湾施設や漁業会館などに使われ雲散霧消することになる（原田、1995、354～360）。

一方、日本常民文化研究所は1949年から本格的に、漁業制度資料の調査保存事業を始める。研究所内に漁業制度資料収集委員会が設置され、委員長に宇野脩平が就任する。研究所は、日本各地にある膨大な漁業資料を蒐集し、整理、筆写による保存をめざすことに邁進する。この背景には、宇野が1943年に招集、満州に派遣され、敗戦後シベリアに抑留された時、ソビエトの古文書館（アルヒーフ）に触れ、日本にも同じような「壮大な古文書館の建設」（網野、1996、253）をすべきだという情熱をもったことによる。しかし、この事業も、1954年に終わりとなり、研究所に未返還の莫大な漁業資料が残るといふ負債を生み出すことになる。

渋沢敬三は、戦前、アチックミュージアムでの調査・研究の経験と成果を、総力戦下から占領期にかけて、実際の社会のなかに、制度へと生かすことを考え、またそのことの必要性を説き、治者としてそれを実践した。それは失敗史であったかもしれないが、渋沢にとって、あるいはアチックミュージアムの人びとにとっても、ある確かな現実、刻印を残したかもしれない。

2) 変わらざるもの

戦後、九学会連合⁽³⁾は、1955年から1957年にかけて薩南十島（奄美群島）の調査を行っている。当時、九学会連合の会長であった渋沢敬三は、1954年の秋、関敬吾と相談し、芳賀日出男に“*The illustrated ethnography of Formosan aborigines*”を渡し、写真による民族誌の制作を依頼している。関は「渋沢先生と話しあって、未開社会だけでなく、日本人の生活の中からもこういう写真集が出来てもよいと考えている。それには奄美調査が一番よい機会だと思う」と述べたという。調査が終わり『奄美—自然と文化』写真篇（1959）が完成し持って行った時、渋沢は「日没から夜おそくまで私たちの写真集をくりかえし眺めながら、御自分が奄美群島をめぐられた時のことを追想し、「最後に、「この写真集は今は学術資料として生々しいが、十年もたてば大変な資料になりますよ。」」（芳賀、1966、2～3）と語ったという。

鹿野と瀬川によるヤミ族の写真集が刊行されたのは、1945（昭和20）年4月であった。当然のことながら、日本の敗戦を見越しての刊行であった。渋沢は占領が終わった1954年に、かつて植民地であった台湾原住民の写真による民族誌と同じものを、この日本国内、奄美でやるべき時が来たと判断する。渋沢のこの考えの背景には何があったのだろうか。渋沢の考えに、変化があったのだ

ろうか。あるいは、何も変わらなかったのだろうか。この10年の間をニコニコ没落しながら、何を見たのだろうか。あるいは、何も見なかったのだろうか。

渋沢敬三は自らの銀行業務を振り返り、独白している。

「金融人の一番大切なことはコンスタンシー、変わらざることなんです。人間の心なんていうものは不思議なもので非常に変わりたい心があるのです。何か常に変化を求めている。と同時に実は変化のないことも求めているのです。ただこれは終始意識にそう強く出ていない。しかし何かに出てまいります。(略) 変わらざるものを持っておることが自分たちの変わって行く時の一つの尺度になる。(略) コンスタンシーというものは何でもないようなことで、むしろどっちかという和陈腐に見えることでありますが、変わらざる心というものはやはり得がたいものの一つで、しかもそれをほんとうの意味で達成することはなかなかむずかしいのであります。」(渋沢、1961、286～287)

注

- (1) 「南島見聞録」を掲載した『竜門雑誌』には、写真は掲載されていない。最初の著書『祭魚洞雑録』に「南島見聞録」を収載するにあたって、初めて自ら撮影した写真と組み合わせている。なお、文章と一緒に写真を雑誌に掲載した紀行文の最初は、「津軽の旅」(『竜門雑誌』517号)である。
- (2) 現在、神奈川大学日本常民文化研究所が所蔵しているこの台湾の探訪旅行において撮られた写真について、6×6の写真は宮本馨太郎が写したものであることが宮本記念財団との照合で明らかになっている。それ以外の35ミリの写真は、鹿野小川徹によるものと考えられるが、小川が写真を残していないことから考え、鹿野が全て撮影したものと推定される。
- (3) 九学会連合とは、日本民族学会、日本民俗学会、日本人類学会、日本社会学会、日本言語学会、日本地理学会、日本宗教学会、日本考古学会、日本心理学会である。

参考文献

- アチックミュージアム、1935、「DIARY」『アチックマンズリー』6号、1935.12
- アチックミュージアム、1937a、「同人小川・宮本両氏 紅頭嶼探訪の途に上らる一期待さるゝそのレポート—」『アチックマンズリー』22号、1937.3
- アチックミュージアム、1937b、「吾等の探訪陣に光彩を加へる 十六ミリ新鋭機 購入せらる」『アチックマンズリー』22号、1937.3
- 網野善彦、1996、「戦後の日本常民文化研究所と文書整理」『歴史と民俗』13号、平凡社
- 福田アジオ、2009、『日本の民俗学「野」の学問の二〇〇年』吉川弘文堂
- 漁業経済学会、1983、『漁業経済学会創立三〇周年記念座談会』
- 芳賀日出男、1966、「渋沢先生と奄美写真集」『渋沢敬三さんの思い出 三』(『日本の民具』第三巻付録) 慶友社
- 原田健一、1995、「漁業経済学と南方学をつなぐもの—解説にかえて」岡本清造『岳父・南方熊楠』平凡社
- 伊藤広之、1987、「(資料) アチック来訪者芳名簿 (一冊)」『大阪市立博物館研究紀要』第19冊
- 加藤友子、2002、「くらしを記録する III—映画—」横浜市歴史博物館・神奈川大学日本常民文化研究所編『屋根裏の博物館—実業家渋沢敬三が育てた民の学問』横浜市歴史博物館
- 鹿野忠雄、1928、「ヤミ族の船に就て」『民族』3巻5号、1928.7
- 鹿野忠雄、1931、「紅頭嶼蕃の使用する船に就て」『人類学雑誌』46巻7号
- 鹿野忠雄、1938、「紅頭嶼ヤミ族の大船建造と船祭」『人類学雑誌』53巻4号
- Kano Tadao and Segawa Kokichi, 1945, "The illustrated ethnography of Formosan aborigines: the Yami tribe", Seikatsusha
- 河岡武春、1973、「第21巻 中国・四国篇(2) 解説」『日本常民生活資料叢書』第21巻、三一書房
- 小林光一郎、2013、「民俗学・民族学的研究への興味とその萌芽」『図録 祭魚洞祭』渋沢史料館
- 丸山泰明、2013、『渋沢敬三と今和次郎』青弓社
- 宮本馨太郎・小川徹、1937、「台湾旅行記」『学報』6号、1937.6、日本民族学会

- 宮本馨太郎、1937、「台湾遠征の両氏帰る」『アチックマンスリー』23号、1937.4
- 宮本馨太郎、1985、「渋沢先生の生涯と博物館」『民俗博物館論考』慶友社
- 宮本瑞夫、2002、「渋沢敬三先生のアチック・ミュージアムと宮本馨太郎—宮本馨太郎日記抄（一）—」『立教女学院短期大学紀要』33号
- Montesquieu, Charles de Secondat, baron de, [1748] 1989, “*De l'esprit des lois*” (野田良之他訳『法の精神』中巻、岩波文庫)
- 村上清文、1979、「村上清文氏談話」『渋沢敬三 上』渋沢敬三伝記編纂刊行会
- 中村俊亀智、1983、「アチック・ミュージアムの足どり—収蔵原簿の分析から—」『国立民族学博物館研究報告』8巻8号、1983.9
- 中野泰、2013、「「漁業権改革」における「日本漁村調査」と民俗学者の実践」『国際常民文化研究叢書2—日本列島周辺海域における水産史に関する総合的研究—』国際常民文化研究機構・神奈川大学日本常民文化研究所
- 中山正則編、1956、「柏葉年譜」『柏葉拾遺』柏窓会
- 日本民族学会、1936、「学会彙報」『民族学研究』2巻2号、1936、4
- 王寺健太、2014、「一般意志の彼方へ」『思想』1076号
- パテーシネマ、1935、「試写室」『パテーシネマ』8巻11号
- 酒井杏之助、1979、「酒井杏之助氏談話（第一回）」『渋沢敬三 上』渋沢敬三伝記編纂刊行会
- 関口浩、2014、「『蕃族調査報告書』の成立—岡松参太郎文書を参照して—」『成蹊大学一般研究報告』46巻3分冊
- 渋沢敬三、1955、「世界の野外博物館—民度の高いある国の話—」『文藝春秋』33巻11号
- 渋沢敬三、1956、「新しい発見」『新国策』4巻25号
- 渋沢敬三、1961、「金融界の回顧」『第1回都市銀行研究会講義録』東京銀行協会
- 渋沢敬三、1963、「日本回顧録 昭和財界史」柏窓社編『日本回顧録 昭和財界史 朝日文化賞受賞記念講演』柏窓社
- 渋沢敬三、1974、「渋沢敬三金融史談」日本銀行調査局編『日本金融史資料 昭和編』第35巻、大蔵省印刷局
- 渋沢敬三、[1933] 1992、「アチックの成長（1933年9月記）」『祭魚洞雑録』、1933、郷土研究社。（『澁澤敬三著作集』第1巻、平凡社、1992）
- 渋沢敬三、[1933] 1992、「南島見聞録」『祭魚洞雑録』（『澁澤敬三著作集』第1巻、平凡社）
- 渋沢敬三、[1940] 1992、「『瀬戸内海島嶼巡訪日記』小序」『犬歩当棒録—祭魚洞雑録第三』（『澁澤敬三著作集』第3巻、平凡社）
- 渋沢敬三、[1961] 1992、「『台湾紅頭嶼ヤミ族』再版に際して（鹿野忠雄著）」『犬歩当棒録—祭魚洞雑録第三』（『澁澤敬三著作集』第3巻、平凡社）
- 渋沢敬三、1993、「旅譜と片影」『澁澤敬三著作集』第4巻、平凡社
- 高木一夫、1972、「高木一夫作成（七二・五・二三）旅行 採訪」渋沢史料館
- 徳川宗敬、1963、「甲辞」『博物館研究』36巻12号
- 山崎柄根、1992、『台湾に魅せられたナチュラリスト 鹿野忠雄』平凡社
- 山路勝彦、2006、『近代日本の海外学術調査』山川出版社
- 柳田国男、1947、「日本民俗学」国民学術協会編『学術の日本』中央公論社
- 柳田国男、[1949] 1968、「水上大学のことなど」『定本 柳田国男集』第1巻、筑摩書房
- 柳田国男、[1943] 1992、「座談会 民間伝承について」『文藝春秋』1943年9月（『柳田国男対談集』ちくま学芸文庫 1992年）
- 柳田国男、[1944] 1970、「老読書歴」『柳田国男全集』第23巻、筑摩書房